自分を見つめる友に幽助は言った。

「蔵馬、話は全部聞いた！オメーの辛い気持ちはわかってる！ブラック・ナイトは俺がぶっ飛ばした！他の奴も俺らで片付けた！この部屋には・・・ここにはもう、俺達が倒すべき敵はいねぇ！M の会の悪事の証拠も見つけた！これであいつらはもう悪さはできねぇ！だから―――」

一度、深呼吸してから言った。

「もう終わりにして帰ろう、蔵馬！！」

植物の荒い呼吸がする中、幽助の声が部屋の中でひどく反響した。

「蔵馬！麻弥ちゃんのことは、俺の責任でもある！オメーは悪くない！悪くないんだ蔵馬！これ以上、自分を責めないでくれ！！」

緑と薄茶色の眼を見ながら彼は言う。

「妖狐・蔵馬も、南野秀一も悪くない！！俺達の蔵馬に戻ってくれ！！」

幽助の声に反応して、オジギソウ達がゆらゆらと揺れる。
彼の言葉に、他の仲間も蔵馬を見る。
しかし蔵馬は・・・

「蔵馬？」

焦点の合わない目で、少しだけ首をかしげる。

「キュ―――・・・ン」

小さく・・・・本当に小さく。
オジギソウや他の植物の声の中でも、なんとか聞こえるぐらいの声で鳴いた。

「・・・へ？」
「キュ、キュンだぁ～！？」

あまりにも可愛い声に、あっけにとられるぼたんと桑原。
普段の蔵馬を知っているだけに、そのギャップに呆然とする。

「お、おい、蔵馬！？オメー何の真似～」

それは幽助も同じで、狼狽気味に名前を呼ぶ。
相手はそれに答えることなく、その場に、麻弥を抱えたまま座り込む。
そして、仲間達が見ている前で、動かない麻弥の頬に顔を寄せる。
抱きしめたまま、鼻を動かし、数回頬ずりをした後で、舌を出してその首を舐めはじめたのだ。

「おぉおおお――――――い！？」
「マジで何の真似だよぉ！？」
「あたしらの前で、いきなりラブシーン！？」
「いや、違う！」

照れる３人をよそに、真面目な顔で飛影が叫ぶ。

「あれは、毛づくろいをしているだけだ・・・！」
「け、け、けづくろい～！？」
「あの猫とか永吉とか、うちの子達がする毛づくろいか！？」
「そうだ！あいつの正体は・・・元は狐だ！変化したことで自我を得ていたが、今の蔵馬は・・・その狭間にいるらしい・・・！」
「狭間！？」

その言葉で、食い入るように蔵馬を見る幽助達。
そこには、先程の無表情とは別に、どこか穏やかな顔で麻弥に触れていた。
何度も何度も、頭を撫で、頬を合わせ、舌を出して顔を舐めていた。ロづけていた。
そうしている彼の瞳は、とても穏やかで、いつもの蔵馬を彷彿とさせた。

「蔵馬・・・！」
「・・・さっきまでは、推測の域でしかなかった。だが、こうして本人を見てはっきりしたぜ！」
「な、なにがだい！？」
「オジギソウが俺達を襲ってきたのは、我を忘れたからじゃない。己がなくなったからだ。」
「え！？」

「『蔵馬』と『狐』の間を意識がさまよっている。だから、誰が誰であるか、識別が出来なくなっちまっているんだ。」
「「さまよってる！？」」
「待てよ！ありえんのかよ、そんなこと！？」
「この部屋に入ってから今まで、俺達はずいぶん騒いだ。我を忘れて怒ってるだけなら、なぜ俺達に気づかない？」
「それは、飛影・・・！」
「幽助。お前の呼びかけにアイツは答えか？蔵馬は今、なにをしてる？」
「それは・・・・！」

俺達が目に入っていないという様子で、麻弥の体に触れ続けている蔵馬。
苦渋に満ちた顔の幽助を見ながら、信じたくない事実を飛影は言った。

「俺の感が正しければ、蔵馬は俺達のことでさえ、わからなくなっている！」

「ヒャッハハハ――――――――――――！！」

飛影の声と蔵馬の声が重なる。蔵馬なのか、妖狐なのかわからない声。

「蔵馬！？」
「ウッフッフ・・・アハハハ・・・殺せ！殺せ！俺の可愛い、しもべ達よ・・・！」
「蔵馬っ！？」
「よけろ、馬鹿！！」

固まる幽助の足元がゆがむ、その体を掴んで飛影が飛ぶ。

「邪王炎殺煉獄焦！！」

黒い炎が上がり、幽助を食おうとした植物が焼ける。

「幽助！飛影！」
「おいおい、攻撃していいのかよ！？」
「馬鹿か桑原！この状況で、そんなお人よしをしてる場合か！？」

幽助と共に着地しながら飛影が怒る。

「飛影！蔵馬が・・・！？」
「なにフヌけた面してやがる、幽助！！死にたいのか！？」
「すまねぇ・・・けど、蔵馬が・・・！」

（俺らがわからないなんて・・・！）

幽助の言いたいことを察し、黙り込む一同。
しかし、感傷に浸っている間はなかった。

「ギィィ――――――――！！」
「ワン、ワン、ワン！」
「きゃー！？みんな、またオジギソウがきたよ！？」
「チッ！落ち込んでいる場合じゃないぜ！」
「おう・・・蔵馬を正気に戻すにも、こいつらが邪魔だからな。」
「同感だね！元を立たないと、この植物達は、あたし達を襲い続けるよ！」

４人を囲みながら、距離を狭めてくるオジギソウ達。

「・・・・こいつら倒せば・・・蔵馬は戻るのか？」
「正確には、こいつらを何とかした後で蔵馬を何とかせねばならん。」
「――――――――――わかった！！」

その言葉を受け、両手で顔を叩く幽助。

「手荒になっちまうかもしれねぇけど・・・」

“幽助。”

脳裏に、自分の名を呼ぶ穏やかな表情の友の姿が浮かんで消えた。